魚津の教育

魚津市教育センターだより172号
令和5年12月 発行
魚津市教育センター
魚津市村木町1番21号
〒937-0053 TEL(0765)23-9161

「学校教育と生涯学習」

魚津市教育センター　所長　細野　祐輔

２年間、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、そこから富山県民生涯学習カレッジで仕事をする機会をいただきました。初めは「生涯学習」とは，何をすることなのか分からず、大いに戸惑いました。そんな中、職務の一つとして講演会の企画・立案、運営があり２年間で多くの講演会を開催することができました。ベストセラー「国家の品格」の著者藤原正彦氏、ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章氏など、錚々(そうそう)たる講師を招へいすることができました。これらの講演会の経験を通して、学んだことがたくさんあります。

講師を選定する際には、年代によって何に興味をもっているのか、何を求めているのか、受講者である県民のニーズを徹底的に分析します。新聞記事、各地で行われている様々な講演会のホームページなどを調べます。このリサーチが十分な時は、驚くほど受講申し込みが殺到します。これは、まさに児童生徒の実態把握と通じるところです。児童生徒が学習内容のどこに興味をもっているのか、またはもちそうか、何を求めているのか、これを十分把握した時の授業での手応えのよさはみなさんも経験があることと思います。

講師交渉は大変です。日程、講演内容、謝金の交渉など。講師の希望額に達していないことが多いのですが、それでも講演を引き受けていただくには、やはり熱意です。講師の書籍を読み、その方の考えや思いを理解した上で講師依頼の文章を作成します。ぜひ富山に来ていただきたいと、観光名所や名産品などを紹介する文章なども織り込みました。相手の立場とこちらの要望を近づけ、合意点を見いだしていく。これはまさに学校における外部人材活用のための交渉に通じるところです。

講演会では、どの講師も、声の強弱、スピード、ボディーランゲージ、表情などの技術を巧みに利用して受講生を引き込んでいきます。しかしながらそれだけでなく、講師は知識を伝える際には、おおよそ「意外性」「予想外」「驚き」「不思議さ」とセットにして伝えます。受講生に「なぜ」「どうして」「なるほど」と一瞬考える間、感じさせる間をつくります。これを繰り返すことで、受講生の知的好奇心はどんどん刺激され、話に自然と引きこまれていくのです。そして講演会終了後には知的好奇心が大いに満たされ、満足感を得て、笑顔で帰っていかれるのです。授業と通じるところではないでしょうか。講師の巧みな講演会の構成は参考にする価値ありです。

知的好奇心を刺激され、楽しい、面白いと感じることが学びの原動力となり、さらに学びを求めていく、これは「生涯学習」も「学校教育」も同じではないか、そう考えることができた２年間でありました。

児童生徒の知的好奇心をくすぐり、わくわくさせることができる学校、教師、授業であるにはどうすればよいのでしょうか、今後もみなさんといっしょに考え、実践していきたいと考えます。

■魚津市教員パワーアップ支援事業

６月６日(火)～９日(金)にかけて秋田県大館市の小中学校に２名の教員が研修に行きました。そこで優れた実践に触れたり、授業づくりや授業実践に参加したりしました。勤務校に帰ってから、研修での学びを公開授業等を通して伝えました。

「受け身の授業からつくる授業へ」　　清流小学校　難波（なんぱ）　情（じょう）

６月６日(火)～９日(金)の４日間、秋田県大館市の長木小学校へ研修に行ってきました。今回、研修に参加した目的は、大館市の優れた実践に触れ、実際に授業づくりや授業実践に参加することで自己の指導力向上を図るためでした。短い間の研修でしたが、今後に生かせる発見や学びがたくさんあり、非常に充実した研修になりました。

長木小学校では６年生担任の松岡先生のもとで研修をさせていただきました。現在、私自身も６年生を担任しているということもあり、自分事として勉強になることが多くありました。授業では主に社会科と算数科を参観させていただきました。授業を見てまず感じたことは、「６年生なのによく手が挙がる」ということでした。よく手が挙がる姿の背景には、発表した意見に対して、周りの子供たちの「お～」や「いいね」などの自然な反応がどの子からも聞こえてくること、授業の目当てやまとめを子供たちの言葉でつくるといった取組を毎日当たり前のように行われていることがあると分かりました。反応が返ってくることでまた発表しようという意欲となり、目当てや課題を子供の言葉でつくることで、与えられた課題ではなく自分たちの課題として捉えることができ、授業に対してより一層参加意識が強くなっていると感じました。やらされる授業ではなく、子供たちが自分たちでつくり上げる授業だと感じました。私が担任しているクラスは手を挙げる子供が少なく、今までは「高学年だから仕方がない」と思っていました。しかし、今回の研修を通して、私は今まで子供たちを受け身にさせる授業をしてきたことに気付かされました。

研修から帰り、まずは友達の意見に素直に反応をするということに力を入れました。初めはどう反応したらよいかが分からなかったり、反応がぎこちない部分もあったりしましたが、徐々に自然な反応が返せるようになってきたと思います。授業中の子供同士の反応が増えることで、意見を聞いてもらえたという実感が生まれ、手を挙げられるようになった子供が増えました。たった数人ですが、とても大きな一歩だと感じました。また、目当てや課題を子供たちの言葉でつくるように心がけています。授業の最初にどんなことをするかなどを話して視点を与え、その後目当てへと移っています。子供たちは最初の話をよく聞いて思い思いに目当てになりそうな言葉を話すようになりました。子供たちの発言から言葉を拾って課題をつくったり、まとめをつくったりすることで、「全員参加の授業」を意識する子供が以前よりも増えたように感じます。

今回私が研修を終えて実践していることは当たり前のことで、小さなことかもしれません。日々の小さな積み重ねが大きな子供の姿になると思い、毎日「子供と共に授業をつくる」を意識して実践を続けていこうと思います。今回の秋田での４日間は、私にとってたいへん有益な研修となりました。

「形だけではない学び合い」の授業　　西部中学校　植木（うえき）　惇（あつし）

「主体的・対話的で深い学び」「令和型の教育」と名の付く研修会に参加し、授業改善に努めてきた。学んだ手法を用いて、授業を展開することに自分なりの手応えを感じていた。しかし、大館市立北陽中学校を訪問し、ある先生との出会いをきっかけに私の指導観が大きく変わった。「形だけではない学び合いを目指した授業」と記された付箋と紹介された授業動画を見て、生徒の主体的な学びについて不明確だった点が腑に落ちた。生徒が自ら課題を見付け、生徒が思考したり、生徒同士で話し合ったりする活動を通して課題を解決する授業、これが「生徒の主体的な学び」につながると理解した。

大館市では市内全体で「共感的・協働的な学び合い」をテーマに「おおだて型授業」を推進している。北陽中学校では、次の視点で授業づくりに取り組んでいる。

・「学美」生徒と教師で創り上げる質の高い学び
・生徒と教師が共につくる「学習課題」や「めあて」、全員挙手からの生徒同士によるつなぎ合い

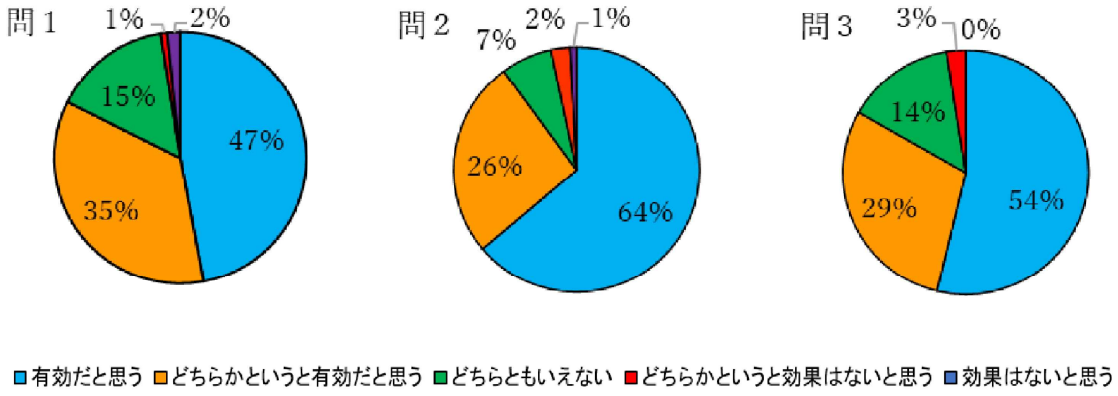
教科問わず、共通の方針のもと、授業を展開している様子が見て取れた。このことから、教科別ではなく、学校全体で研究に取り組める点、どの教科でも生徒の学び向かう姿勢が同じである点は大変参考になった。

研修を終え、「主体的・対話的で深い学び」に向けて、次の取組に重点を置いて授業改善を行った。

① 生徒と教師が共につくる「学習課題」「めあて」
② 生徒同士の学び合いで課題を解決する授業展開の工夫
③ １時間の授業の思考の流れがわかる板書構成

実践開始から４か月後、生徒に授業に関するアンケートを実施した。

問１．生徒と教師が「学習課題」「めあて」をつくる取組は、授業でやることを意識する、「やろう」という意欲を高めるために有効だと感じますか？
問２．生徒同士で学び合う活動は学びを定着させる（わかったと思えるようにする）ために有効だと感じますか？
問３．授業の流れがわかるようにまとめた黒板は、何を学んだかがわかるようにするために有効だと感じますか？



すべての取組について８０％以上の生徒が有効性を実感している。特に、問２「学び合い」に関する内容については９０％が有効性を感じている。また、「授業の感想」では、「班のみんなやクラスのみんなと話し合って課題と解決し合うということが、とてもやる気が出て、課題について理解がより深まるような気がしてとてもうれしいです。」などの肯定的な記載が目立った。授業中は、生徒が率先して席を立って集まり、自然に議論が始まる。互いの考えを発表する姿や、「なるほど」と考えを深める姿が教室にあふれている。「主体的な学び」を目指した授業は、学習内容の理解だけでなく、生徒の学ぶ姿勢の変化にもつながっている。

今回の研修で得た最大の成果は「視点」である。「こんな活動・取組」という手法ではなく、「生徒の主体的な学びのために何をすべきか」という「視点」をもつことで、授業展開や声掛けが変わってくる。「どう教えるか」という教師主導の視点ではなく、「どう学ばせるか」という学びの伴走者という教師の役割を大切にしたい。

■内地留学研修を終えて

令和５年度 富山県教育委員会派遣 教員カウンセラー養成事業内地留学
■期間:令和5年4月1日～9月30日　場所:富山大学教育学部附属教育研究実践総合センター

「子供たちが安全にネガティブ感情を体験するために」

よつば小学校　野田（のだ）　暁子（あきこ）

今年度、４月から半年間、富山大学教育学部附属教育研究実践総合センターで石津憲一郎教授のもと、研修をさせていただきました。

たくさんの「出会い」と「発見」がある半年間でした。今まで出会ってきた子供たちや親御さんのことを思い浮かべながら，教員生活を振り返る貴重な機会となりました。これまで学校現場では、子供たちの「つらい」「悲しい」「悔しい」などのネガティブな場面に直面することが多く、教員としてどのように向き合っていったらよいのかを常に考えていたように思います。大学で多くの文献を読み、講義を受けていく中で学んだ「安心・安全」という視点は、発達の面で難しさを抱えている子にも、家庭環境で支援が必要な子にも、どちらでもない子にも大切な教育の土台になると感じました。

私は、この内地留学を通して、子供たちの感情に寄り添いながらその裏に隠れているニーズが何か見付けることの大切さを学んだと同時に、自分がどのようなことが得意で、またどのようなことが苦手なのかを改めて知ることができました。そして、私たち大人が子供たちのポジティブな面もネガティブな面も含めた小さな変化に気付き、その子が何を必要としているのか、その子の「好き」や「得意」が何なのかを知ることこそ、子供たちの「安心・安全」へとつながる第一歩であると感じています。生活していく上で避けることのできないネガティブな場面を、子供たちが安全に体験し、それぞれの方法で向き合っていくことができるような支援を目指していきたいと思っています。

パラシュートでドームを作る

■授業のアップデートを目指して

とやま型学力向上プログラム講演会　　参加者56名

８月18日（金）に新川文化ホールで、桃山学院教育大学二瓶弘行教授をお迎えし、とやま型学力向上プログラム研修会を開催しました。

金子みすゞの詩「犬」を題材に、対話的で深い学びへと導く授業づくりについて、参加者みんなで体験しながら学ぶことができました。「問題（課題）意識を高める」「問題解決につなげる対話」など、確かな学力につながる授業改善のヒントを多く得られた研修会になりました。

研修会後の感想を２つ紹介します。

・　詩の指導において、違和感や心地よさという漠然としたところから、技法や意味の深さに気付いていくことを体験できました。一つ一つの言葉をしっかりと拾えるようにすることや、話をしたいと思える環境を整えていくことを改めて意識して２学期の授業づくりをしていきたいと感じました。

・　聞き手を育てることの大切さを、改めて感じました。他の人の意見を聞くことで自分の考えが広がり、またという意欲につながりました。３、４人で話すワイワイタイムは小さなことでも気軽に話すことができ、その後の全員での共有も、どんなことでも話していいんだという安心感をもって参加することができました。２学期以降、聞き手を育てて全員が安心して参加できる授業を目指していきたいと思いました。

魚津市学力向上講演会　　参加者100名

11月21日（火）にありそドーム研修室で、明星小学校校長　細水保宏先生をお迎えし、魚津市学力向上講演会を開催しました。

授業形式の講演で、細水先生から投げかけられる「問題」や「発問」で、会場の先生方は「はてな？」「なるほど」「だったら、～」と、自然と「深い学び」へ導かれていきました。会場全体が「学びの空気」に包まれ、細水先生がおっしゃった「連続ドラマ型で深い学びを創る」を実感できる場でありました。これから自らが目指していく授業をイメージさせてくれる、そんなお話でした。

アンケートより、感想の一部を紹介します。

・先の読める児童生徒を育てることが大切だと思った。
・想定外に出合わせることが学習の楽しさにつながることが分かった。
・「えっ？」と生徒に聞き返すことで、根拠や論理を聞き出し、そこから、つまずきを把握することができることが分かった。
・素敵な子供の行動を価値付けていくことが大切だと思った。
・模擬授業で、問題が分かったときの気持ちよさを感じることができた。子供たちにも同じように味わわせたいと思った。
・先生はコーディネーターである。いつ、どんな時も子供たちが主役となるよう、様々な手立てを全力で講じていくことが教師の仕事なのだと分かった。
・「なぜ」「なるほど」と子供たちの頭と心が動く授業にするため、教材研究をしっかりとして授業に臨みたいと思った。

■夏の研修会

情報教育研修会　　参加者54名

7月25日(火)に市教育センターで午前・午後の部にわけて情報教育研修会が行われました。県総合教育センター主任研究主事東海直樹先生、主任研究主事阿久津理先生、研究主事大浅忠雄先生3名を指導講師として、「Formsを利用したアンケートづくり」や「Teams等を利用した課題の出し方」等の研修を受けました。

研修後には、「Teamsの便利な機能が分かり、授業や学校生活で利用したくなった。Formsの小テストやミニクイズへの活用は楽しみながら作成できた。」「受講者のスキルごとに課題が用意されていてよかった。」などの感想がありました。

第３回　若手教員研修会　　参加者15名

８月１日（火）に初任から３年目までの教員を対象とした、第３回若手教員研修会を開催しました。４つのグループに分かれ、課題ごとに討議し、市内の中堅教員が一人ずつ加わりアドバイスする形で内容を深めました。

研修１では「一人一人の児童生徒理解のための『見る』ポイント」について、研修２では、「提示された課題を元に問題についての対応の仕方」について、それぞれ話合いながら、児童生徒理解の方法を学びました。

研修後の感想を紹介します。

- 生徒指導のあり方や児童生徒理解の方法について学ぶことができた。教師は児童生徒に多大な影響をあたえる存在であることを十分に認識し、生徒指導を行っていきたい。
- 子供たちの普段の様子、ちょっとして変化から背景にあるものを考え、対応することの大切さを実感した。
- 同じ課題に対しても小中で違う視点あるのが興味深かった。
- 中堅の先生からアドバイスをもらうというスタイルは昨年より実践的で具体的な話を聞けたので、満足度が高かった。
- 横のつながりを深めるためにグループの話合いは良かった。

理科教育講座（自然観察）中級コース　　参加者９名

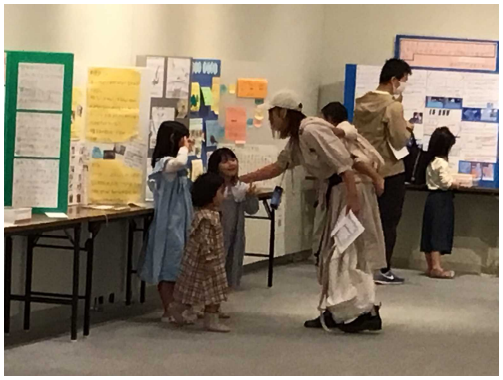
８月22日(火)に松倉地区を中心に理科教育講座（自然観察中級コース）が開催されました。「自然観察に関する研修を行い、指導力の向上を図る」目的で、県総合教育センター科学情報部主任研究主事堀井良徳先生、研究主事二塚裕子先生の指導を受けながら、地層の観察(室田層)、水生生物の観察(大熊川)、太陽の観察、地形等の観察(松倉城跡)を行いました。受講後に「フィールドワークでは、標本や画像で感じられない本物のよさが感じられた。」「知らない植物や生物を知るわくわく感をぜひ子供たちにも授業で味わってほしいと思った。」などの感想がありました。

■第60回　魚津市小･中学校科学展覧会

魚津市小･中学校科学展覧会が、9月23日(土･祝)・24日(日)の2日間にわたり新川文化ホールで開催されました。

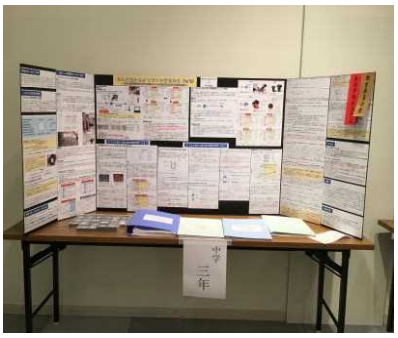
「くふう創作の部」、「研究調査の部」、「標本･模型の部」の３部門に、市内各小中学校から選出された44作品の出品がありました。「魚津市教育委員会賞」に14作品が選ばれ、そのうち３作品が県科学展に出品されました。天候にも恵まれ、市内外から昨年を上回る302人の来場がありました。

来場者から「アイディアや視点がすばらしい」「広々とした空間で見やすく展示してあった」など、概ね好意的な意見が寄せられました。



◇科学展入選者のみなさん◇

◇　魚津市教育委員会賞・富山県科学展覧会「中学校優秀賞」受賞



中村　昌樹（なかむら　まさき）
西部中学校　３年

テーマ　ラムネ笛からオリジナル笛を作る Part３

所見　昨年度、一昨年度から継続的に行った研究。研究を進める中で出てきた疑問から、仮説を立て研究を発展させている点が素晴らしいです。集大成となる今回の研究では、ラムネ笛の音の発生原理をつきとめることができました。

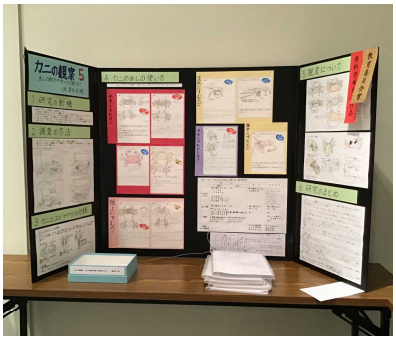
◇　魚津市教育委員会賞・富山県科学展覧会「研究努力賞」受賞

瀧本　悠晴（たきもと　ゆうせい）
よつば小学校　１年

テーマ　スーパーボールのはねかたのけんきゅう

所見　日頃から遊んでいたスーパーボールのはね方について興味をもち、研究を進めました。スーパーボールの大きさ、手を放す高さ、床の材質の違いによって、どんなときによくはねるのかを調べているなど、条件を変えて、粘り強く実験を行っています。記録を丁寧にとり、結果にまとめているところがすばらしいです。

◇　魚津市教育委員会賞・富山県科学展覧会「研究努力賞」受賞



清水　彩桃（しみず　さと）
経田小学校　６年

テーマ　カニの観察５
あしの動きや使い方を調べよう

所見　５年間継続した「カニの観察」からさらに発展し、あしの動きをもっと詳しく知りたいという意欲をもって観察を進めました。またカニと同じようなはさみやあしを持つエビやヤドカリにも興味をもち、似ているところと違うところを調べました。様々な場所に出かけて採集、飼育する中で気付いたことを詳しく記録し、たくさんのデータから考察をしている点がよかったです。

◇　魚津市教育委員会賞・富山県発明とくふう展「魚津市長賞」受賞

大川　莉瑚（おおかわ　りこ）
道下小学校　５年

テーマ　ぺんがたメガネふき

所見「父親が使っているメガネふきにほこりなどがついてしまう」という身近な悩みを解決できないかを考えて、創り出した作品です。シンプルな材料で持ち運びも簡単で、場所を問わず、左右どちらからも使え、すぐにメガネをきれいにできる点がよかったです。

氏　名	学校・学年	テーマ
眞下（ました）　瑠璃（るり）	清流小学校・２年	アイスキャッチ
藤原（ふじわら）　和花（わか）	星の杜小学校・３年	巣断（すだ）ちくん
辻村（つじむら）　佳暉（よしき）	清流小学校・３年	すきまにピッタリべんりくん
川岸（かわぎし）　駆（かける）	清流小学校・３年	アイスのとけ方のけんきゅう
澤山（さわやま）　陽香（はるか）	清流小学校・３年	ゴムの力を調べよう！
轡田（くつわだ）　智広（ちひろ）	よつば小学校・３年	海の宝さがしPart２～貝について調べよう～
川島（かわしま）　彩（あや）	清流小学校・３年	化石発掘！～アンモナイトと恐竜をさがせ～
延山（のぶやま）　悠人（ゆうと）	道下小学校・５年	バク転、がんばるぞ！
大森（おおもり）　莉良（りいら）	経田小学校・６年	体脂肪と骨格筋 運動の関係～速く走るには？～
三橋（みつはし）　凛子（りんこ）	西部中学校・２年	発酵食品の菌の培養

※入選者の作品は魚津市教育センターのHP(https://www.uozu-c.tym.ed.jp 各種事業＞科学展覧会)でご覧になれます。

「日ごろ仕事をしている上で思うこと」

魚津市特別支援教育コーディネーター　印田（いんでん）　幸代（さちよ）

魚津市特別支援教育コーディネーターとして仕事を始めて5年目になります。その間、教育現場ばかりでなく様々な分野の方と繋がりがもてました。現在は、日々、人と繋がることの心地よさを感じながら、自分に何ができるかの模索をしている毎日を送っています。しかし、今まで自分が学んできたことを生かして少しお役に立てて、相手が元気になることを嬉しいと思っている毎日でもあります。

現役の時とは違って、保護者や子供たちと関わる機会が増えました。その中で「本人がどう思っているか、どうしたいのか」を語ってもらい、くみ取っていく必要性を痛感しています。「自分で決めて納得して進む」ことができることは、とても大切であることを感じています。

今後も日々、自分自身が新しい出会いや関わりを楽しみながら仕事をしていきたいと思っています。このような立場に立てたことを感謝しております。